

## 多様な性と生を尊重できる社会へ

あなたは、今、あなたらしく生きていますか？あなたらしく生きることは、楽しいことですか？苦しいことですか？あなたの大切な人は、今、その人らしく生きていますか？

人として、性的マイノリティの当事者として、自分らしさをテーマに「対話型講演会」を実施されている田崎智咲斗さんにお話を伺いました。

### ■「自分らしさとは何か」という自身への問い

講演会では、自分自身が、性的マイノリティの当事者の一人であると同時に田崎智咲斗というひとりの人として生きていくことをお伝えします。今の社会では性的マイノリティが注目されるようになってきました。困り感・生きづらさなどは、マイノリティかそうでないかに関わらず、人それぞれ違います。

誰が性的マイノリティであるかということは他人が決めるわけでもなく、本人が選択したわけでもありません。分からないからこそ、ひとりひとりが「自分らしく」あることができる社会に、何が必要かを考えるきっかけになってほしいと願い「問い」続けたいと思っています。

### ■小学生・中学生の頃

20、30年前はLGBTQ(性的マイノリティ)についての情報がとても少なかったと思います。自分こそよく分からなかったと、当時を思い出します。その当時、思っていたのは、「みんなと違うということは悪いことなんだ」「世間にご迷惑をかけているんだ」「親に悪いことをしているんだ」といった感情に戸惑っていました。

「みんなと違う」ことは、例えば一般的に「男の子が好きと言われるものを自分も好きだったり」「女の子なのに女の子のことが好き」ということなどです。女の子同士が集まって話す「誰が好き？」に素直には答えられず「何々君」「私も(男の子)が好き」と話を合わせていました。当時は自分自身が性的指向と性自認を混同して考えていましたし、性の多様性についての知識を得る方法もありませんでした。きっとこの「誰が好き？」という会話の中に、同性が好きな人もいることが当たり前話すことができていたなら…という思いもありますが、その頃の自分

は周りの目や偏見、差別が「怖くて」本当のことは一切話せませんでした。「みんなと同じこと」を言った方が丸く収まると思い、そうして過ごしていました。

### ■性教育の中での、命の授業

小学校では、養護教諭の先生を中心に、性教育に力を入れており、HIV、AIDS、同性愛等の性の多様性についても学びました。教科、担任、学年を超え、先生方みんなで「何に取り組むか」について一生懸命考えてくれました。その中で、男女の身体の違いや二次性徴のこと、性交渉や自分を大切にすることを当たり前教えてもらいました。

また、HIVに対する勉強には特に熱心に取り組む、HIVの勉強では、性教育＝命の授業として、どの命も平等であることを、HIVを通して教えていただき、みんなとは違う感覚にいる自分を異質なものであると感じながらも、少しは客観的にとらえられていたのかなと、今になって感じています。

### ■自分の表現方法を少しずつ変えていく

小学校4年生の頃から、少しずつ自分の表現を変えていきました。それまでは髪の毛は腰までと長く、フリフリのブラウスやスカートにピンク色の靴を履くような子でした。でも心の中では「しっくりこないな」「いやだな」と思いながらも、親には言えずにいました。親を傷つけるのが怖かったし、自分が傷つくことも怖かったからです。きっかけは、青い靴を履きたいと言ったことに対して、母親が履かせてくれなかったことでした。自分を表現する方法は「これだ」と伝えないと、自分がしんどい気持ちになることを知ったのです。親に対して、このジーンズま

でだったら許されるだろうかとか、この髪型までだったら許されるだろうか等、「これぐらいだったら許されるだろうか」をいくつか試し始めました。自分も周りの目が気になる性格でしたので、本当は「男の子」のような髪型がよかったのですが、「これぐらいの長さまでだったら許されるだろうか」と周りの目を気にしながら自分が納得できる表現を探すことを日々繰り返しました。その葛藤は戸籍を男性に変更するまで、ずっと続きました。

### ■女子校でのこと

高校は女子校でした。「誰がレズビアンか」みたいな話もよくしました。男性みたいにみえる子は、女性が好きと思われることが多いのかな。私はというと「自分」の表現のひとつとして、髪の毛を短くして、カバンも潰して持ち、「ちょっと私って違うでしょ」という格好いいものへのあこがれを少しずつ出し始めました。これぐらいだったら、ちょっと変わったおもしろい子って言われるかな？などと考えていたように思います。

周りとは少し違う雰囲気、少し男の子ぽくしていた私は、「レズビアンやろ？」と言われることも増えました。そのときには性的マイノリティかもしれない部分を隠すために、次の3パターンの対応方法を繰り返しました。1パターン目は、真っ向から否定をする。「私も男の子好き」と言って周りに合わせてみる。2パターン目は友だちを標的にする。「あの子、女の子が好きって言っていた」などと嘘もつきました。3パターン目は、テレビで見たタレントのまねをして、ネタにして笑いを取る。「レズビアンやろ？」と聞かれたら、「え、なんでわかった？」と言いながら、友だちにキスするまねをしたこともあります。今思えば、人権侵害で、差別だったなど反省しています。心の片隅で、自分も同じような性的マイノリティのひとりかもしれないのに、と思いつつも、その方法しか分からなかったのです。

日によってはそんな自分にも疲れしました。生理の時と重なると、生理そのものが辛いのですが情緒も不安定で、今思えば自分の身体と心の

違いを受け入れられなかったことが、心身共に自分を追いつめてしまっていました。

### ■カミングアウト

高校時代は、ボーイッシュスタイルを、自分のスタイルとして見せていたと思います。ただ、「女の子が好き」という感情は、中学生の頃から変わらずに、できるだけ隠していました。

そんな私でも、高校3年生の卒業式の前の日に、初めてカミングアウトすることに決めました。これが今の自分の人生にとって、転機となるとはこの時は思いもしませんでした。

「そのままの自分を伝えたい」と思う友だちに素直に話しました。一番仲が良かった子かと聞かれると、そうでもなく、その子とは別のグループでしたが、なぜかいつも大切な話を聞いてもらっていた友だちでした。今でも、なぜか気を許して喋れる、そんな友だちのひとりです。その友だちに、「女の子が好きだけどレズビアンではない、自分のことを男と思っている」と伝えました。その友だちの返事は「よく分からないけど…私に話をしてくれてありがとう」ということを言ってくれたのが、とても嬉しかったと思えます。これが自分らしくあっている、と思えるようになったスタートラインとなりました。



### ■性と生を考える仲間との出会い

性別、性自認、性的指向、性表現に関わらず、様々な人が集まって性と生について考える会合に足を運んだのは27歳のときです。

会場に入る瞬間はとても緊張していました。参加者は20人以上。想像していたよりたくさん人がいるなと思いました。そして、次の瞬間、少し不思議な感覚に襲われました。あれ、ここにいる人たちは、見た目だけでは誰が性的マイ

ノリティで、誰がそうではないのか、よくわからない。緊張していたのに、少し拍子抜けしました。ほとんどの人はマイノリティかどうかわかりません。でも、参加者はみな、そんなことはどうでもいいような様子でおしゃべりをしていました。ここでは、どんな人も特別ではない。だけど、どの人もみんな特別な存在である。私はそんな感覚になりました。性の問題は人権問題であること、つまり性の問題は生そのものの問題であることを学ぶことになります。

### ■対話型講演会

性を人権の視点で考える会合に参加していく中で、会の主宰者の勧めもあり講演会などで、自分の言葉で語り始めるようになりました。当初は性的マイノリティとしての苦勞を語り、「田崎さんはかわいそう」と同情してもらっていた講演会でした。今では、私の話をもとに参加者と一緒に性と生について語り合い、「多様な性と生を尊重できる社会」を考える講演会になるよう心掛けています。

きっかけは「対話」によるまちづくりに取り組む福岡県津屋崎町の山口覚さんとともに、2019年2月に対話型の講演会に挑戦したことです。参加者は、性的マイノリティの当事者である私の話を聞き、「私らしさ」と「あなたらしさ」について語り合おうと集まった人たちです。

対話型講演会は、参加者が私の話を聞くだけでなく、参加者同士で私の話を聞いて考えたことを話してもらい、そこで話されたことを踏まえ、さらに私が話すということを繰り返し、「自分らしさ」について深めていくというものです。

参加者同士の対話はかなり盛り上がりました。居心地のいい場所や時間について楽しそうに話す学生、「学校で授業を受けているときは一番自分らしくない！」と明かす高校生もいました。そして、自分らしさなんて考えたことがなかったと打ち明ける人、自分らしさは大切な恋人や家族との関係の中でつくられていると語る社会人もいました。

3時間半の対話が終わった後、アンケートに書かれた感想を見て私は驚きました。それまでと内容が一変していたのです。「田崎さんがかわ

いそうだった」「田崎さんにはこれから幸せになってほしい」という同情の言葉が消え、「自分の中に隠している多様さをもっと大切にしたい」「自分は、これまで他者を、そして自分自身を傷つけていたことがわかった」など「自分」について語る言葉があふれていました。

さらに、社会人の感想の中には「自分も昔は、若い頃は、どちらの性が好きなのかがわからなかったことを思い出した」と打ち明けるものもありました。性自認や性的指向は成長する中で揺れ動くことがあると講演で説明しても、それを自分の経験として認める声はそれまでありませんでした。他者と話すことによって、自分の中に隠れていたものに自ら目を向けるようになったのでしょうか。

これまでの講演会なら「自分は性的マイノリティではないから関係ない」と思っていたかもしれない人が、性と生の多様性を尊重できる社会を実現するために「自分はこうしたい」と一歩踏み出して考えている……私は対話の力の大きさに感動しました。

それ以来、講演のトーンも変わりました。以前は、聞いている人に否定されないように、感情を込めて涙を誘うように話をしていましたが、否定されたら「実は僕自身、昔は、自分はおかしいのではないかと自己否定していたのです」と正直に話し、性の多様性は決して自然に背いたものではないということを、データを用いて説明すればいいと考えるようになり、講演の語り口は冷静になりました。

そして何より、講演を聞いた人たち同士が語り合う中で、きっと「人にはそれぞれの性と生のあり方がある」と気づいてくれると、私自身が他者を、対話を信じられるようになりました。

性と生について考える対話型講演会はこれからも続けていきます。私も、性と生の多様性をみなさんと一緒に考え、学んでいきます。

#### プロフィール

**田崎 智咲斗** さん

合同会社虹縁(こより)代表  
相談支援専門員

(ブログ) <https://note.com/tasakichisato/>